

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2010年度研究成果報告書

研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	コミュニティ福祉学研究科・コミュニティ福祉学専攻・2年	矢内真理子	
指導教員	所属・職名	氏名	
	コミュニティ福祉学部・教授	福山清蔵	
研究課題	発達障害が早期に疑われる幼児の愛着の質的変容	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 1名

研究の概要 (200~300字で記入)

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。) [発達障害児] [児童福祉] [愛着] 本研究は就学前親子共同参加型療育活動に1年通った母子の愛着の変容過程の研究である。筆者は「積極的な参与」として参与観察を行い、観察記録を基に母子の相互関係についてKJ法で分析し愛着の発達の段階に再配置し、月別の特徴を事例的に検討した。結果、初期は母子のやりとりは少なかったが、遊び=共同作業を経験し母子間に「快」の関係性が構築された。そして母親の行動変化(積極的関わりから見守る態度)による分離不安が表れ、それを境に母親を第一愛着対象者として強く認識するようになる。後期は母親を心理的安全基地としながら集団活動に参加し、母子の愛着は親密な相互疎通性のあるものへと変化した。

研究成果の概要

本児の愛着の特徴として、愛着は3つの場面で質的変容がみられた。①個々の関係から、共同作業を通じて作られた安定的な「快」の関係(期間:5~9月/児:2歳11ヶ月~3歳3ヶ月)では、児は動き回ることが多く母親とのやりとりは少なく持続性がなかった。愛着行動は生後6ヶ月頃までに出現する特定の人物(主に母親)へのサイン行動が中心。7月には遊びを介して相互交流が増え、児は「遊び」を母親と共有することで母子関係=【「快」の関係】と捉えるようになったと推察。質・量的にも母子間の「前協働遊び」に変化が見られ愛着行動も増加した。②母親の行動変化に伴う密着的關係への変容(期間:10~12月/児:3歳4ヶ月~3歳6ヶ月)では、前協働遊びが多く母子間で特定の遊具を用いてコミュニケーションをとる場面が多く見られた。一方で母親の行動変化(積極的態度から見守りの態度)により、初めて活動内で「泣く」や「分離拒否」の分離不安を示し、生後1歳頃に出現する分離不安が3歳4ヶ月を過ぎて出現した。母親の存在確認行動や身体接触を要求行動も多く、母親をより強く第一愛着対象者として認識していたと推察。③心理的安全基地の關係(期間:1~3月/児:3歳7ヶ月~3歳9ヶ月)では、言語・非言語の交流がみられ母子のやり取りは疎通性に富み充実していた。行動範囲の拡大・他児との相互的関わりに伴い危険や葛藤場面に対し、母親を心理的安全基地(一般に1歳過ぎに出現)と認識し、さまざまな活動場面への対応を3歳7ヶ月で可能にする。また3歳頃に形成される愛着対象に関する表象モデルの出現もうかがわせた。上記より、児の愛着の質的変容は、初期に築いた「快」の關係性(「快」の対象)を中期に喪失したことで分離不安が生じ密着・接近行動が増加し、(児に対する見守りの態度は変わらないもの)遊びを介した「快」の關係性の再構築を通じて、後期には母親を心理的安全基地として集団活動に参加し表象モデルによって分離不安を示さなくなるなど、愛着は親密で相互疎通性のあるものに変容していった。愛着の発達子ども一人ひとりで異なるが、本児の場合、親子共同遊びによる「快」の情緒の育ちをきっかけに劇的に変化していった。

※ この(様式)に記入の、経過・成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表(研究によって得られた研究経過・成果を発表した①~④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)
- ④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

家庭児童相談室勉強会(2010年7月会・12月会、2011年5月会)